

潜伏キリシタンは何を語るか

—「長崎の教会群」をめぐる世界遺産登録とツーリズム—

松井圭介

筑波大学生命環境系

本稿では、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」における世界文化遺産への登録過程のうち、特にストーリーの再構築に焦点を当て、潜伏キリシタンを世界遺産化することの課題を空間の政治学の視点から検討した。「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」からの転換において、構成資産を可能な限り維持しつつ、禁教期における潜伏キリシタンの信仰生活に焦点化したストーリーへの再構築が図られた。この変更は、世界遺産登録を目指す国・県が作成する世界遺産推薦書における価値の見直しという形で具現化した。ナショナル／リージョナルでのスケールでの資産への価値づけの言説は、必ずしもローカルアクターの想いを反映するものではなかったものの、世界遺産登録を目指す共犯関係が成立し、表立ったコンフリクトは生じていない。グローバル・ナショナル／リージョナル・ローカルという三者の空間的關係を信仰世界の理解という視点からみると、そこには近代知が生み出した学問的なカテゴリーによる信仰世界の解題という状況が生じていること、またツーリズムとの関係でいえば、この世界遺産をいかにして可視化し、それをいかに語るのかが大切であることが指摘された。

キーワード：潜伏キリシタン、長崎の教会群、世界遺産、物語（ストーリー）、空間の政治学、ツーリズム

I はじめに

本稿は、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」（以下、「潜伏キリシタン関連遺産」）における世界文化遺産への登録過程のうち、特に物語（ストーリー）の再構築に焦点を当て、潜伏キリシタンを世界遺産化することの課題を空間の政治学の視点から検討することを目的とする。

「潜伏キリシタン関連遺産」は当初、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」（以下、「長崎の教会群」）として、わが国の世界遺産暫定登録リストに掲載された（2007年1月）。このとき、文化庁が世界遺産候補として評価したポイントは主に以下の3点であった（松井2012；松井2016）。第一に独自性（ユニークネス）である。長崎の教会群とその関連遺産は、世界史に類をみない長期の潜伏からの劇的な復活という歴史性を有していると考えられた。第二に物語性（ストーリーの秀逸さ）

である。これは、聖ザビエルによる布教以来、日本のキリスト教（カトリック）がたどった数奇な歴史、すなわち「栄光→弾圧→潜伏→復活」が悲劇と忍耐、そして200年以上の潜伏から劇的に復活したという物語のもつ魅力である。第三に顕著な価値（OUV：outstanding universal value）である。これは西洋と東洋の建築文化が見事に融合した実に多様な展開と高い造形意匠の達成であり、これら3点を総合して、世界文化遺産登録基準の ii, iii, viに該当するものと判断された¹⁾。

「長崎の教会群」が暫定登録リスト入りした直後から、長崎県内各自治体では積極的に構成資産候補の検討がなされてきた。図1からも世界遺産登録への期待の大きさがうかがえる。一方で、暫定リスト入り当初から、世界遺産登録をめぐる様々な課題が検討されてきた。それらは例えば、何を「長崎の教会群」の価値とみなすのか、現存する教会の建築様式なのか、潜伏キリシタンな

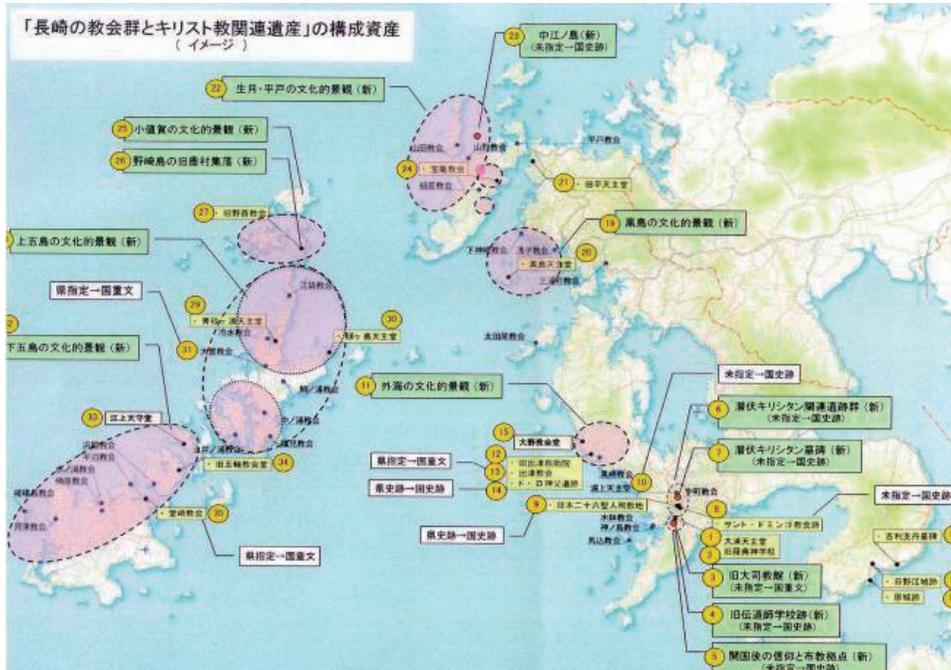


図1 暫定登録リスト入り後の「長崎の教会群」構成資産候補

(長崎県HPから引用；現在は閲覧不能)

どの歴史性なのか、また構成資産の数はどのくらいが適切なのか、文化財指定を受けていない教会や関連遺産も多くあるなか、どのようにして保全し、さらに離島など交通条件に恵まれない地域において、いかにして公開していくのか、といった議論であった(松井, 2013)。本稿では、主に世界遺産登録に関わる長崎県作成資料および現地調査に基づき、「潜伏キリシタン関連遺産」がいかにして世界遺産登録されたかについて、ストーリーの部分に着目し、世界遺産としての価値がどこに見出されていったのか、空間の政治学の視点から解釈していく。

本稿の構成は以下の通りである。II章では、当初「長崎の教会群」として登録が予定されていたものが、「潜伏キリシタン関連遺産」として再推薦のうえ登録された経緯について、顕著な普遍的価値(OUV)として何が評価されたのか、イコ

モス(ICOMOS)による勧告と対応を整理した上で、「潜伏キリシタン関連遺産」のストーリーの骨子と各構成資産の位置づけについて検討する。続くIII章では、グローバル、ナショナル/リージョナル、ローカルの3スケールに大別し、各スケールにおける主なアクターを示し、なかでも世界遺産登録において中心的な役割を果たした長崎県(ナショナル/リージョナル)作成の推薦書にみられるテキストを分析し、ローカルアクターとの関係性を考察する。最後にIV章において、「潜伏キリシタン」が世界遺産化されることの意味を近代知による信仰世界の解釈に関わる問題およびツーリズムとの関係から検討する。研究資料には、長崎県世界遺産課、NPO法人長崎巡礼センターや地域住民をはじめとする世界遺産登録とツーリズムに関わるステークホルダーへの聞きとり調査に加え、『推薦書』等の文献資料を用いた。

II 世界遺産の創造：「教会群」から「潜伏キリシタン」へ

1. 「長崎の教会群」の価値

周知の通り、「潜伏キリシタン関連遺産」は当初、「長崎の教会群」として世界遺産登録を目指していた（松井, 2016）。2016年にユネスコの世界遺産委員会に提出された推薦書では、「長崎の教会群」における世界遺産のコンセプトと構成資産との関係を示したものが図2である。県の学術会議において検討が重ねられた結果見出された価値とは、先述した「西洋と東洋の建築文化が融合して生み出された多様な展開と高い造形意匠の達

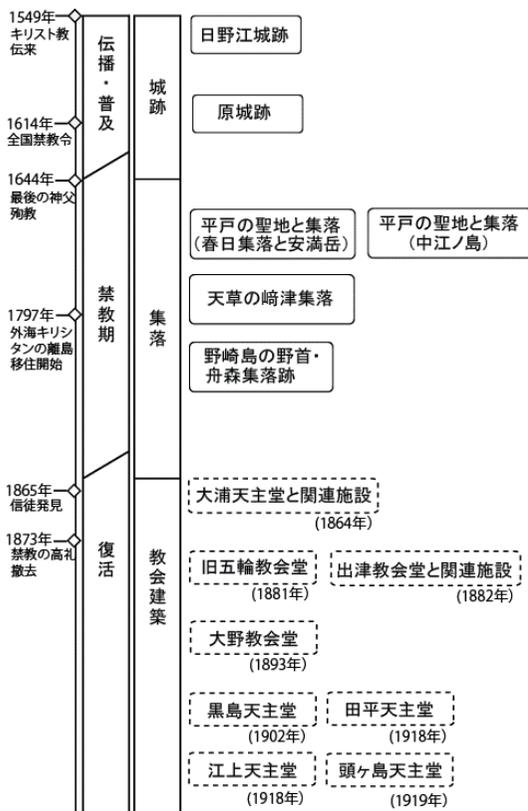


図2 「長崎の教会群」における世界遺産のコンセプトと構成資産の対応（2016年5月）

（松井（2016）より引用）

成」であった。世界遺産推薦書の前文には、以下のように記載されている。

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は、16世紀以来の日本におけるキリスト教の受容過程を示す類いまれな遺産である。この受容の過程は、16世紀におけるキリスト教の日本への伝播および日本国内での普及、信徒が密かに信仰を継承した1614年以降の禁教時代の潜伏、そして19世紀半ばに禁教が解かれた後の復活と、大きく3段階に分けられる。大航海時代にヨーロッパから初めて日本にもたらされたキリスト教は人々に受け入れられ、時代とともに独特な文化的伝統が生まれた。

本資産は、16世紀以来の東西交流と、この交流のなかで生まれた文化的伝統を語る顕著な物証である。

キリスト教の伝来から禁教令が敷かれ最後の神父が殉教した17世紀前半までの「伝播・普及」期、1873（明治6）年に禁教の高札が撤去されるまでの「禁教期」、以降を「復活」期とし、各期を代表する資産として「城跡」「集落」「教会建築」の三つのコンセプトを対応させ、計14の構成資産が推薦された。図2からも窺えるように、復活期に建築された教会建造物およびその関連施設が資産の中心であった。

2016年夏の世界遺産登録を目指して準備が整い、あとは登録勧告の吉報を待つ段階まで来ていた「はず」であったが、2016年2月にイコモス（国際記念物遺跡会議）の中間報告で出された結果は、推薦書の見直し勧告であった。イコモスから指摘された「長崎の教会群」に対する課題は、価値をどこに見出し、どのように証明するのか、という点に集約される。「長崎の教会群」自体のOUVは認められた一方で、価値のとらえ方自体の見直しが求められた。すなわち「伝播・普及」

「禁教期」「復活」という時代区分およびそれらに対応する「城跡」「集落」「教会建築」のコンセプトの問い直しであった（松井, 2016）。

2. イコモスの指摘と対応

イコモスによる指摘は、日本におけるキリスト教遺産の独自性は230年に及ぶ禁教期の歴史にあり、この時代の歴史的遺産に照射した推薦内容を再構築すべきであるとの勧告であった。この勧告を受け長崎県では、急ぎ物語（ストーリー）を見直し再出発を図ることとなった。すなわち従前の「東西の建築文化の融合」や「キリスト教の受容の歴史」から、「江戸時代における潜伏キリシタンの信仰継承に基づく独特な伝統」への転換であった。2016年3月末、新しい推薦書原案が文化庁に提出され、同5月には構成資産を12に絞り込

むとともに、名称も「教会・天主堂」から「集落」とするなどの見直しが図られた。図3は新たな推薦書原案に基づく「潜伏キリシタン関連遺産」における構成資産の分布を示したものである。イコモスとアドバイザー契約が結ばれ、彼らの意向を確認しながら作成された推薦書は2018年6月30日、バーレーンで開催されたユネスコ世界遺産委員会において世界文化遺産への登録が認められた（図4）。この間に進められた関係者各位の苦勞の大きさは想像に余りあるが、一方、わずかな期間で全く新しいコンセプトの推薦書を作成することは不可能である。保全状況と今後の保護・管理計画に鑑みても、構成資産の追加は困難であり、現実的な対応としては、「長崎の教会群」の構成資産を極力維持しつつ、ストーリーをイコモスの意向に沿ったものに描き直していくことで



図3 「潜伏キリシタンと関連遺産」における構成資産の分布（2016年5月）

（長崎県HPより引用）



図4 「潜伏キリシタン関連遺産」の世界遺産登録を伝える新聞記事

(長崎新聞電子号外 2018年6月30日)

あった。それではどのように「潜伏キリシタン関連遺産」へとストーリーの書き替えがなされていったのであろうか。

3. 「潜伏キリシタン関連遺産」のストーリー

図5は、先の図2に示した「長崎の教会群」のストーリーの枠組みに「潜伏キリシタン関連遺産」の構成遺産とストーリーを上書きする形で整理したものである。キリスト教伝来以降を、1)「信仰の継続に関わる伝統の開始・形成」の段階、2)「信仰の継続に関わる伝統の多様な展開」の段階、3)「移住による信仰組織の戦略的維持」の段階、4)「信仰における新たな局面が到来し、信仰の継続に関する伝統が変容・終焉」の段階、と大きく

四つに区分し、それぞれに一つ～五つの構成資産が当てはめられている。このうち、緑色で示した六つの資産は名称こそ異なっているものの、「長崎の教会群」と同じ資産である。青色で示した六つの資産は「長崎の教会群」では、いずれも復活以降の教会建築として構成資産となっていたものであるが、それぞれの教会の立地する集落という形で読み替えがなされたものである。黒色の二つは、ストーリーの変更に伴い推薦を取り下げた資産である。この図から、イコモスの指摘を受けて、時代区分2)、3)にあたる禁教期の潜伏キリシタンを核心とし、この困難な時代を生き抜いてきた人々の生活文化の営為としての文化的伝統が「集落」という形で残されたというストーリーが読みとれる。これらの集落で密かに信仰をつないでいた人々の子孫たちが、明治時代以降に教会を献堂したという形で「長崎の教会群」の資産を活かしたと言えよう。換言すれば、監督・キャストは変更せず、ストーリーを修正して一つの作品を完成させたと言えるだろう。

図6は世界遺産登録後に県世界遺産課がまとめた構成資産の位置づけである。図中のⅠ～Ⅳが先述の時代区分に相当する。リーフレットやホームページ等では、推薦書の文言が平易に書き改められており、ここでは、Ⅰ 宣教師不在のキリシタン「潜伏」のきっかけ、Ⅱ 潜伏キリシタンが信仰を実践するための試み、Ⅲ 潜伏キリシタンが共同体を維持するための試み、Ⅳ 宣教師との接触による転機と「潜伏」の終わり、として構成資産の価値が記載されている²⁾。次にこの「潜伏キリシタン関連遺産」の世界遺産登録をめぐる動きを空間スケール別に検討する。

Ⅲ 「潜伏キリシタン関連遺産」と空間の政治学

1. 三つの空間スケール

図7は、本世界遺産をめぐる空間スケールとし

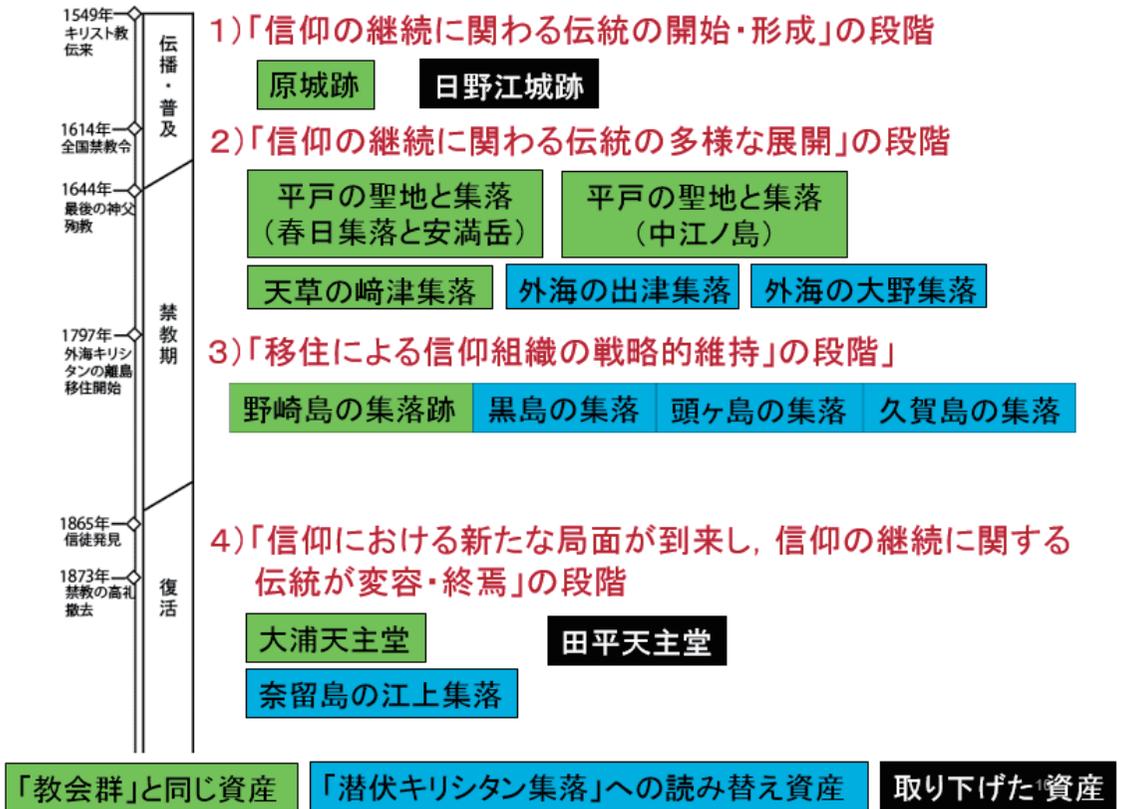


図5 「長崎の教会群」における世界遺産のコンセプトと構成資産の対応 (2016年5月)

(松井 (2016) を改変)

て、グローバル・ナショナル／リージョナル・ローカルの三つを措定し、それぞれのアクター（主体）と実践について整理したものである。アクターは厳密にひとつの空間スケール内部に包摂されるものではないが、ここでは最も有効に機能していると判断したものに充当した。

世界遺産をめぐるトランスナショナルなグローバルスケールで機能するのが、ユネスコ（世界遺産委員会）やバチカン（ローマ教皇庁）である。国際政治や世界宗教としてのローマカトリックの舞台である。ユネスコの世界遺産委員会は、世界遺産の登録・審査・指導を行う主体であり、下位の空間スケールのアクターに対しては支配的な立

場にある。

ナショナル／リージョナルスケールには、国（文化庁）・県（世界遺産登録推進課ほか）などの行政やカトリック（中央協議会や長崎大司教区）が該当し、グローバルアクターからの指導には対応責任を持ち、一方で下位の空間スケールのアクターに対しては、予算や候補選定などにおいて支配的な立場にある。ナショナルとリージョナルとの間には、国と県、カトリック中央協議会と大司教区といった階層性もみられるが、両者の間に利害関係の対立はなく他の空間スケールのアクターに対しては、同様の機能を有することから一つにまとめた。

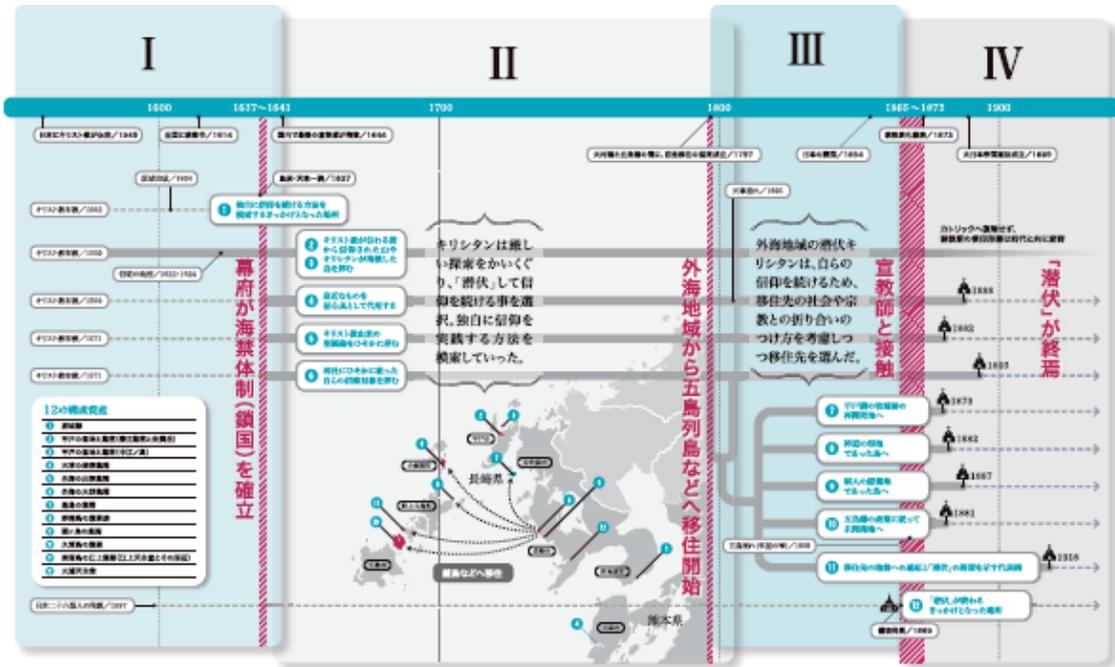


図6 「潜伏キリシタン関連遺産」における構成資産の位置づけ (2018年9月)
(長崎県HPより引用)

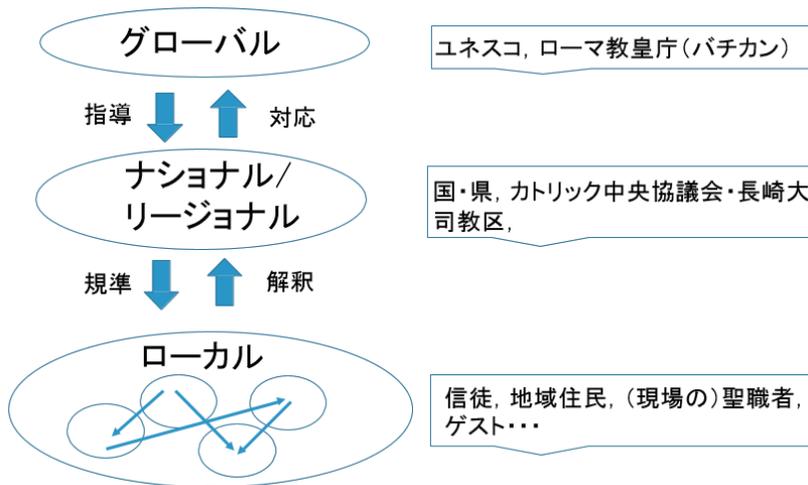


図7 「潜伏キリシタン関連遺産」をめぐる空間スケールと主要アクター

これに対して、ローカルスケールのアクターは多様である。地域住民やカトリックの信徒（ローカルホスト）、教区の聖職者（神父）やゲスト（観

光客や巡礼者）もローカルアクターに含まれる。世界遺産をめぐる空間スケールで最も中心的な役割を果たすのがこのスケールであるが、アクター

が多様であること、かつアクター間の相互関係が複雑であることが特徴である。

それでは、「潜伏キリシタン関連遺産」の世界遺産登録推薦において、ナショナル／リージョナルスケールとローカルスケールとの間でどのような葛藤がみられたのであろうか。言うまでもなく、ナショナル／リージョナルスケールでのアクターは、本資産を世界遺産登録し、公共財として保全・活用していくことが最大の目的である。他方ローカルスケールでのアクターは、世界遺産登録に対して一枚岩ではなく、立場によって様々な対応を取り得る。カトリック信徒と非信徒（仏教徒ほか）、ツーリストと巡礼者、あるいは観光関連産業従事者か否か、といった利害が一致しないアクターもあり、当然ながら個人の価値観の相違もある。

本章では、ナショナル／リージョナルスケールでのアクターの言説については、推薦書や県作成のリーフレットに記載されたテキストを手がかりに、またローカルスケールでのアクターの言説については、これまでのフィールド経験で得た聞きとりデータに基づき、両者を対照しつつ以下の4点について節を設けて指摘したい。

2. 「潜伏キリシタン関連遺産」の独自性

第一に、「潜伏キリシタン関連遺産」の独自性に関わる解釈である。本世界遺産の正式名称からも窺えるように、長崎・天草地方の地域固有性が強調される。

資料1

日本各地には宣教師との接触が絶たれた後も、厳しい探索をかいくぐり、潜伏して信仰を続けることを選択した「潜伏キリシタン」(原文ママ)が存在した。しかし17世紀後半に日本の各地で「崩れ」と呼ぶ大規模な潜伏キリシタンの摘発事件が相次いで発生し、

その結果、一部の例外を除き日本各地の潜伏キリシタンは途絶えた。その例外となった地域がかつての宣教拠点であり、他の地域に比べて長期にわたる宣教師の指導の下に組織的な信仰の基盤が整っていた長崎と天草地方であった。従って、潜伏キリシタンが自らの信仰を継続した伝統の証拠となる資産は、長崎と天草地方にのみ存在する。(下線部筆者、以下同じ) (『推薦書p.37』)

資料2

歴史を物語る12の構成資産が長崎と天草地方の半島や離島に点在しているのは、大航海時代にキリスト教が伝わったアジアの東端にあたる日本列島の中で、最も集中的に宣教が行われた場所だからである。(『世界文化遺産 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産リーフレットダイジェスト版』)

ここでは、潜伏キリシタンに関わる信仰の伝統が長崎・天草地方に固有のものであること、およびその理由について記載されている。これに対するローカルアクターの批判的言説は寡聞にして聞こえてこない。しかしながら、「長崎と天草地方のみに存在する」(資料1)と断定することには、違和感も残る。組織的な信仰形態がある程度の空間的広がりをもって社会制度として維持されてきたことについては、この地域に限定されるものと考えられる。しかしながら豊後崩れ(1660～1682年)、濃尾崩れ(1661～1665年)など、禁教期に入っても各地ではキリシタン摘発と迫害・殉教(崩れ)が勃発しており(片岡, 2010)、この時代のキリシタン史には議論の余地が残されているとも言えるだろう。資料2の下線部については、解釈にもよるが最も集中的に宣教が行われた証を信徒数と考えるならば、17世紀初頭30万人といわれるキリシタン(大橋, 2016)の多くは、京・大坂などに分布し、長崎・天草地方が信徒数で優

勢となったのは、他の地域で棄教者が多く現れたことが要因である。先述したようにローカルアクターから批判的言説が生まれてこない理由は、長崎・天草地方という地域固有性の強調は双方の利害が一致するためと推察される。これに対して異議を唱えたとすれば、他地域のローカルアクターということになるであろうか。

3. 寛容な地域社会イメージの強調

第二に、寛容な地域社会イメージの強調である。図5、図6のⅢ期の遺産にあたる久賀島の集落についての推薦書の文言をみると、以下の記述がみられる。

資料3

潜伏キリシタンの移住先は、全て農業に適さない土地であり、自力で開墾するには移住者の数が不足していた。そのため、潜伏キリシタンは仏教徒の水田の隣に新たな水田を開いたり、又は仏教徒が行う農漁業などに伴う各種の作業を協働で行ったりするなど、仏教徒である島民との間に何らかの互助関係を築く必要があった。（『推薦書p.148』）

資料4

久賀島では、潜伏キリシタンが移住によって形成した集落及び彼らが互助関係を結んだ仏教徒の集落が島内の全域にわたって分布し、両者の互助関係を示す生業の土地利用形態は現在も良好に継承されている。（『推薦書p.149』）

ここでは、仏教徒（先住者）と潜伏キリシタン（移住者）が互助関係を築きながら、共生していた様子が強調されている。これに対して次に、ローカルアクターの言説を一つあげる。

資料5

浜脇の集落（注：1881年に建立された浜脇教会が立地する島西部の集落）もかつては50軒ほどあったが、今では2世帯を残すのみ。この地区は水が豊富でかつては山腹にも多くの人が住んでいた。住んでいたのはカトリックの信徒たちだった。それでも食べていくにはギリギリで、終戦後にはボリビアやブラジルへと海外移民する人も多かった。カトリックの人たちは、貧しいので（海外のみならず）村内（久賀島内）でも山から里へと移動していた。高度経済成長期になると島民の多くは大阪や福岡、名古屋などの都市部へ出ていき、空いた土地にカトリック（の人たち）が入っていった。自分は仏教徒だが、カトリックの人たちとのつきあいは今でもない。仏教徒とカトリックは住み分けがなされている。カトリックの人たちは言葉遣いが丁寧だが、これはかつての地主（仏教徒）・小作（カトリック）という主従関係が要因ではないか。（2018年11月の聞きとりによる）

資料5は自由発話による聞きとり調査のデータであるが、類似の話は久賀島の各所で耳にした。もともと山がちで耕地に限られた島嶼部において、外海地区（現長崎市）から開拓民として、あるいはインフォーマルな移民として18世紀に移住してきた潜伏キリシタンたちは、島民からみればよそ者であり、島の限られた土地資源を脅かす歓迎されざる存在であったことが容易に想像される。

実際に1868（明治元）年に発生した五島崩れでは、多くの潜伏キリシタンたちが狭い牢屋に収監され、拷問をうけた。同年旧暦9月に発生した久賀島での崩れでは、200人ほどの収監者がわずか6坪ほどの牢屋に押し込められ、食事もほとんどとることができず、多くの殉教者を出した。牢屋の殉教記念教会の敷地内には殉教の悲劇を伝える記念碑が設けられ、久賀島を訪れるツアー

トの多くが立ち寄る場所である（図8）。訪問者はガイドからこの場所で何があったのか、またなぜ発生したのかについて説明を受ける。久賀島訪問のハイライトでもある。推薦書では、牢屋の窄事件についてどのように記述がなされているのだろうか。

資料6

宣教師との接触を契機として、久賀島の潜伏キリシタンは公然と自らの信仰を表明するようになった。1868年に五島列島の一円で弾圧が行われ（五島崩れ）、その一環として狭い牢屋に多数の信徒が監禁され、多くの死者が出た（牢屋の窄事件）。久賀島は解禁の直前に潜伏キリシタンへの弾圧が加えられた最後の弾圧の現場となった。解禁後牢屋の窄事件が起こった場所には殉教者を弔うための教会堂と記念碑が建てられ、カトリックへと復帰した久賀島のキリスト教信者にとって今なお禁教期の記憶の場所となっている。（『推薦書p.149』）

資料6が牢屋の窄事件に関する記述となるが、弾圧の事実やナショナルな意味での弾圧の原因は記述されているものの、なぜここまで苛烈な弾圧となったのか、また誰が実際にキリシタンたちを苦しめたのか、推薦書は語っていない。ローカルな文脈において、ジゲ（地下物：先住者）とイツキ（居付き：潜伏キリシタンの移住者）との間



図8 牢屋の窄殉教記念教会の敷地内の記念碑
(2018年11月撮影)

に社会的・経済的なコンフリクトがあり、結果的に「弱きものがさらに弱きものを叩く」構造が生み出されたことはおそらく事実であろう。中園（2018）が指摘するように、潜伏キリシタンの信仰形態には地域差があり、権力との関係も時代によって異なる。移住先の土地条件や生業、時代背景など様々な要因により、仏教徒と潜伏キリシタンとの間に共生的関係が築けた地域・時代もある。推薦書を作成するうえで、史実に関する取捨選択がなされるのは当然であるが、こうした公式の推薦書では語り得ないローカルアクターの実存とアクター間の葛藤をいかにして拾い上げていくかが課題となる。

4. 宗教戦略としての移住

第三に、Ⅲ期における外海地方から各地への潜伏キリシタンの伝播を、宗教戦略としての移住という切り口で説明した点である。ここでは事例として、黒島（佐世保市）（資料7）、および頭ヶ島（新上五島町）（資料8、9）をあげる。

資料7

黒島には19世紀前半に移住した潜伏キリシタンに起源をもつ六つの集落が分布し、指導者の屋敷跡、墓地、生業に関わる土地利用形態が大きく変わることなく残されている。（中略）黒島への移住することにより、移住先の社会・宗教とも共生しつつ、自らの信仰組織を維持しようとした潜伏キリシタンの戦略を表している。（『推薦書p.113』一部改変）

資料8

1858年無人島であった頭ヶ島に開拓を目的として、仏教徒の前田儀太夫が移住した。翌年には儀太夫が募った数家族が頭ヶ島へ移住した。彼らは外海地域から中通島へ移住した潜伏キリシタンであった。彼らは仏教徒であった頭ヶ島の開拓指導者と行動をと

もにすることにより、表向きは仏教徒を装いつつ、先住の仏教徒との軋轢を避けて、さらに安住の地である無人島の頭ヶ島を再移住先を選んだものと考えられる。（『推薦書p.136』一部改変）

資料9

頭ヶ島には、病人の隔離地であったことを示す近世の墓地、仏教徒であったにもかかわらず、潜伏キリシタンが営んだ禁教期以来の農地等の土地利用に関する地割…（中略）が良好に残されている。それらは病人の隔離地へと移住することにより自らの信仰組織を維持しようとした潜伏キリシタンの戦略を表している。（『推薦書p.137』一部改変）

これらのテキストからは、「信仰を守るために苦難に耐え、安住の地を求めて各地に戦略的に移住した潜伏キリシタン」というイメージが浮かびあがる。外海地域から五島や平戸、黒島など各地へ移住した潜伏キリシタンたちが、ある程度移住先の情報を持ち、出身者たちの社会的ネットワークを基盤に移住が進められていったことは想像に難くない。急峻で狭い農地を耕地に変えていった高い農業技術と、晴れていれば眼下に島影を捉えることのできるこの地域の地理的特性を活かして、潜伏キリシタンたちは各地へ移住することができたであろう。一方でこの移住を宗教戦略だけで説明することにも無理がある。1797年に始まる大村藩（外海）から五島列島への移住は、人口不足に悩む五島藩から大村藩への移民の申し入れであった。「五島へ五島へと皆行きたがる。五島やさしや、土地までも」と謡われた憧れの地である五島は、キリシタンについては寛容であったが、先述した通り生活の苦しさ・貧しさには変わりなく、後に、「五島は極楽、行てみりゃ地獄、二度と行くまい五島が島」と謡われた（五島市世界遺産登録推進協議会, 2015）。彼らの移住は宗

教戦略である前に生存戦略ではなかったか。両者は矛盾するものではないが、まず生きていくことが第一で、生きていくなかで先祖から受け継いだ信仰も大切に守り伝えられたと考える方が自然であろう。

この推薦書に記述されたナショナル／リージョナルスケールでの語りは、ローカルレベルではほとんど認識されていない。世界遺産登録から9カ月が経過した2019年3月現在、例えば地元ガイドの方の語りや住民の認識にほとんど影響はみられない。しかし今後、世界遺産観光が成熟していくなかで観光の現場でどのような語りが構築されていくのか、注意深く見守る必要があるだろう。

5. 問い直される教会の価値

第四に「長崎の教会群」との価値の接合性である。図2、3で比較検討したように、「長崎の教会群」と「潜伏キリシタン関連遺産」の間にはストーリーの再構築が相違点であるものの、構成資産の根幹には違いはない。したがって各構成資産の価値自体には違いはなく、ストーリーに沿った強調がなされているかどうか、新旧推薦書における違いとして想起される。資料10は、奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）についての新旧推薦書にみられる記述である。

資料10-1

江上天主堂は19世紀以降長崎に建てられた木造教会の中で、最も整った形式を見せるものの一つである。（『旧推薦書C-7江上天主堂』）

資料10-2

江上天主堂は、潜伏キリシタンが移住先として選んだ江上に固有の迫地形及び禁教期にまで遡る在来の建築意匠・工法の双方に基づく風土的特徴と、信徒たちがカトリック教会堂として希求した西洋的特徴

とが融合しているという点において、長崎と天草地方に建造された教会群の中でも、潜伏キリシタンの信仰継続に関する伝統が変容・終焉したことを最も端的に示す教会堂である。（『推薦書p.160-161』）

旧推薦書では、資料10-1の前に教会堂の建築様式についての説明がされており、日本式の床東が使用された西洋風教会建築物として、「西洋と東洋の建築文化が見事に融合した実に多様な展開と高い造形意匠の達成」の例として顕著な価値が見出されている。ところが、新推薦書では、教会堂が和洋折衷の建築文化であることに触れつつも、建築上の価値に言及することなく、反対にこのような教会が建てられたことが、潜伏キリシタンの信仰の継続に関する伝統の変容・終焉の証左であると位置づけられている。このことは教会（建築物）がもつ意味が転換を余儀なくされたことを苦しげに告白している。筆者の既往研究でも触れたが、もともと「長崎の教会群」を世界文化遺産に登録しようという運動は、離島や周辺部に残る歴史の生き証人として守るための有効な手段としてであった（松井, 2013）。人口流出と高齢化が進み、社会組織の維持が困難になりつつある地域において、いかにして価値ある教会を守っていいのか、が運動の出発点であった。今回の「潜伏キリシタン関連遺産」では世界遺産登録は成功したものの、大浦天主堂を除けば教会は主役ではなく、多くの教会は、禁教期における潜伏キリシタンの人々における生活営為の帰結という位置づけとなった。このことは、一部の教会関係者には大きな落胆をもたらしたものの、世界遺産登録を実現するための巧みな戦略として、ローカルアクターたちにも受け入れられている。教会の価値をめぐる大きな転換は従前の推薦書と比較して矛盾もみられるものの、ナショナル／リージョナルなスケールでの語りとローカルスケールでのアク

ターたちの語りの間には大きな齟齬はなく、いわば共犯関係にあると言えるだろう。今後この世界遺産が語られていくなかで、教会の位置づけはどのように扱われていくのか、注視する必要があるだろう。

IV おわりに：共犯関係は何を生み出すのか

以上本稿では、「潜伏キリシタン関連遺産」における世界文化遺産への登録過程のうち、特にストーリーの再構築に焦点を当て、「潜伏キリシタン」を世界遺産化することの課題を空間の政治学の視点から検討してきた。本稿を結ぶにあたり、ナショナル／リージョナルとローカルの間には結ばれた共犯関係について知見を整理したい。

ナショナル／リージョナルスケールで主要アクターである長崎県（世界遺産登録推進課）および国家（文化庁）は、構成資産の文化財指定や保全を進めるとともに、公式推薦書の作成・提出、ガイドブックの作成や観光行政の推進などの実務を遂行してきた。上位にあるユネスコの指導を受けつつも、それに適切に対応し世界文化遺産登録という成果を得た。ローカルスケールでのアクターは多様であるが、世界遺産登録に対して温度差はあるものの、積極的に反対する動きはなく、上位のアクターとは緩やかな共犯関係、別言すれば世界遺産登録を目指す同志と言えるだろう。ナショナル／リージョナルスケールが構築したものは、公的な地域ストーリーとしてのキリシタンである。長崎・天草地方が世界の人類史において顕著で普遍的な価値をもつ潜伏キリシタンの信仰伝統をもつ地域であるというストーリーである。一方、ローカルスケールでは、アクターに応じて多様なストーリーが埋め込まれている。それらは例えば、迫害・殉教・潜伏・復活といった歴史であり、そこに秘められた悲劇や貧困、差別・被差別の問題である。こうした歴史は教会建築や殉教

地、墓地などの景観構成要素によって可視化され、人々の集合的アイデンティティを強化している。

図9は、「潜伏キリシタン関連遺産」をめぐる三者の空間的關係を潜伏キリシタンの信仰世界の理解という視点から模式的に示したものである。ローカルな地平には、ギアツのいうローカルノレッジが埋め込まれている。そこには近世以前の人たちがもつ民衆的な宗教世界があり、人々は聖なるものとして、様々な神仏やキリスト教のシンボルを拝みの対象とし、習合的な信仰世界を築いてきた。宗教学や文化人類学、民俗学などの学問はこうした民衆の信仰世界の解読を試みてきたが、その際に神道や仏教、キリスト教、潜伏キリシタン、かくれキリシタンといったカテゴリーを生み出し、宗教現象をこれらのカテゴリーに当てはめてきた。本来は未分化で神道・仏教・潜伏キリシタン・キリスト教などと峻別できない信仰世

界から、世界遺産という権威的枠組みのもと、潜伏キリシタンの要素が脱埋め込み化され、日本のキリスト教史と接合された。この世界遺産という権威によりオーソライズされた潜伏キリシタンは、再埋め込み化され、ローカルな人々に影響を与えている。この世界遺産の前提には、「日本のキリスト教の価値はどこにあるのか」がある。世界遺産の主旨は文化的固有性ではなく、人類史上の普遍的価値であり、仕方のない部分もあるが、前提として潜伏キリシタンはキリスト教の特異な一形態という枠組みであり、そこには日本の民衆宗教の一形態という視点は欠落している。宮崎(2018)が指摘するように、そもそも潜伏キリシタンの人々は何を信じていたのであろうか。アイテムとして十字架やメダリを所持・利用していた彼らが信じていた信仰世界は何であらうか。

最後に本世界遺産とツーリズムとの関係について言及したい。世界遺産登録後、各集落や施設へ

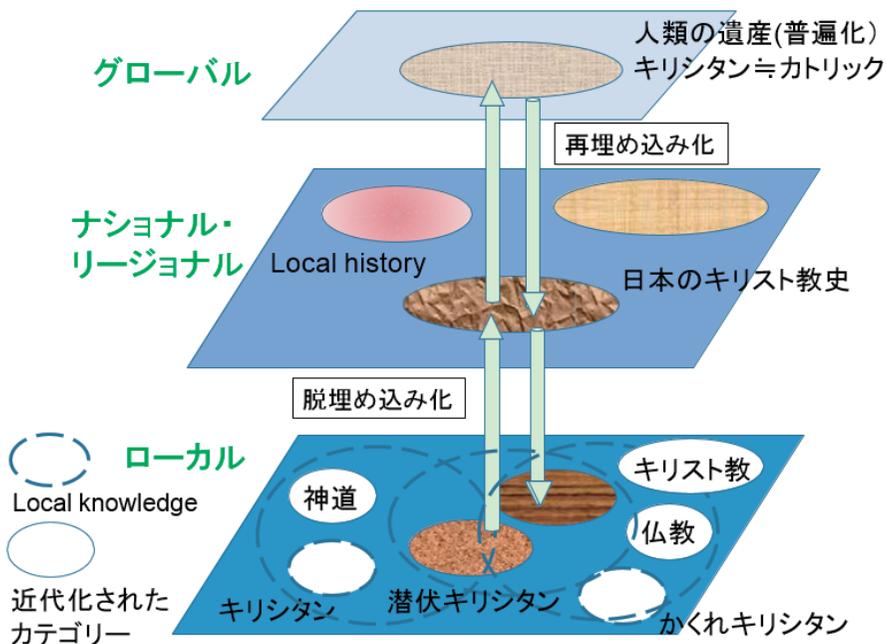


図9 信仰世界の理解からみた「潜伏キリシタン関連遺産」をめぐる空間的關係

の訪問者数は対前年比でみると順調に増加しているが、他の世界遺産地域と比較して観光資源化は容易でない。「潜伏キリシタン関連遺産」が観光のまなざしを受ける際に、ツーリストにとって難易度が高い理由として、以下の3点が考えられる。

第一に、何を可視化するのか、可視化の対象の問題である。本世界遺産のコンセプトは潜伏キリシタンの信仰と生活文化であるが、禁教期における隠された信仰であるがゆえに、物証や史資料も少ない。第二に、いかに可視化するのか、可視化の方法の問題である。観光客にとって現存する教会や春日集落の棚田などの文化的景観は具体的に視認できるため、有力な観光資源になりうるが、それらは世界遺産の本質ではなく、人々の営為の帰結である。とくに観光客が一番期待する教会建造物は、本世界遺産では後景となっており、相当の知識と関心がなければ理解は難しい。他方、教会自体も歴史の長さや建造物の規模、壮麗さなどの点においてヨーロッパの著名な教会と比較して、優位性があるとは言えず、名所旧跡巡りを期待する観光客にとって観光資源としての魅力と価格との間にギャップがあることが予期される。法隆寺や金閣寺、あるいは宮島や日光東照宮のように、見学だけで満足感を得ることは難しく、場所の魅力を伝えるガイドが必要となる。第三は、いかに語るか、この場所でおきた歴史的経験をいかに可視化させるかの問題である。ツーリストの観光体験を豊かにし、満足度を高めるとともに、資産の適切な保全・管理を行うためにもガイドは必要である。

本稿は、シンポジウム報告として予察的な考察を含んでおり、こうした議論は今後さらに事実を積み重ねることによって検証していくことが必要である。もって今後の課題としたい。

〔付記〕

本稿はJSPS科研費補助金「世界遺産の創造と場所の商品化に関わる理論的・実証的研究」(基盤研究A 研究代表者:松井圭介)による成果の一部である。現地調査では長崎県世界遺産登録推進課、NPO法人長崎巡礼センターをはじめ各所でお世話になった。また現地調査の際には、多くの方に聞きとりをさせて頂いた。以上記して感謝申し上げます。

注

- 1) 世界遺産の登録基準は10あるが、このうちii, iii, ivは次の通りである(公益社団法人日本ユネスコ協会HPによる)。

基準ii ある期間を通じてまたはある文化圏において建築、技術、記念碑的芸術、都市計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの。

基準iii 現存するまたは消滅した文化的伝統または文明の、唯一のまたは少なくとも稀な証拠。

基準vi 顕著で普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統、思想、信仰または芸術的、文学的作品と、直接にまたは明白に関連するもの。

- 2) 本世界遺産において潜伏キリシタンとは、「キリスト教禁教期の17～19世紀の日本において、社会的には普通に生活しながらひそかにキリスト教由来の信仰を続けようとしたキリシタンのこと」と定義され、彼らの「信仰を实践するために独自の対象を拝むという試み」と、「共同体を維持するために移住先を選ぶという試みを併せて「潜伏キリシタンの伝統」とした。

文 献

- 大橋幸泰(2016):16-19世紀日本におけるキリシタンの受容・禁制・潜伏. 国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇, **12**, 123-134.
- 片岡弥吉(2010):『日本キリシタン殉教史 片岡弥吉全集1』智書房.
- 五島市世界遺産登録推進協議会(2015):五島キリシタン史. <http://www.city.goto.nagasaki.jp/sekaiisan/>

- common/pamphlet/pdf/ [Cited:2019/3/14]
 長崎県世界遺産課ホームページ：<http://kirishitan.jp/>
 [Cited:2019/3/14]
- 中園成生 (2018)：『かくれキリシタンの起源 信仰と信者の実相』弦書房.
- 文化庁 (2015)：長崎の教会群とキリスト教関連遺産：世界遺産推薦書。
http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9552458/www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/sekai_isan/suisenchu/ [Cited:2019/3/14]
- 文化庁 (2017)：長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産：世界遺産登録推薦書。
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/sekai_isan/ichiran/1407709.html [Cited:2019/3/14]
- 松井圭介 (2012)：ヘリテージ化される聖地と場所の商品化. 山中弘編著『宗教とツーリズム』世界思想社, 192-214.
- 松井圭介 (2013)：『観光戦略としての宗教：長崎の教会群と場所の商品化』筑波大学出版会.
- 松井圭介 (2016)：誰のための世界遺産か－「教会群」にみるジレンマ－. 地理, **61**(7), 50-59.
- 宮崎賢太郎 (2018)：『潜伏キリシタンは何を信じていたのか』角川書店.

What does “Hidden Christian” tell? : World Heritage Registration and Tourism on “Christian Sites in the Nagasaki Region”

MATSUI Keisuke

Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

Keywords: Hidden Christian, Nagasaki Church Group, World heritage, Story, Politics of space, Tourism

